

# 安乗人形芝居保存会

安乗文楽「テコシバイ」などと呼ばれることもある「安乗の人形芝居」は長い歴史を持ち、国の重要無形民俗文化財にも選ばれています。全国的にもよく知られるこの郷土芸能を伝承している「安乗人形芝居保存会」では、地域全体が力を合わせ、心を一つに伝承の形人形芝居を次世代につないでいきます。



「日高川入相花王」  
渡し場の段※

お問い合わせ  
「安乗人形芝居保存会」  
TEL 090-2687-3276  
(石井 太佳夫会長)

「安乗人形芝居保存会」は、人形芝居とともに古い舞台建築や人形なども受け継ぎ、また先人たちの「想い」も大切に伝える地域全体の活動です。今回は、会長の石井太佳夫さんに代わり、書記を務める尾崎壽美さんにお話を聞きました。

——「安乗人形芝居」は、喜怒哀楽の表現が素朴で大胆かつ野趣に富むと評価されていますが、古くから行われてきたのですか。

尾崎：はじまりは400年以上も昔のようです。豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄の役)の際、水軍の将として出兵した志摩の国主・九鬼嘉隆が、戦いで武功をたて、御礼参りに再び八幡神社(現在の安乗神

社)を参拝した時、村人たちが手踊りなどで歓迎した。この時に村人の願いを叶えて人形芝居を許したとされています。その後、風待ち湊で来港した大阪や、阿波国、淡路国などの人々の影響を受けながら続いてきたということですね。

——義太夫による「浄瑠璃」や「文楽」と呼ばれる芸能が確立される以前から、素朴な人形芝居が行われていたのですか。保存会の発足はいつですか。

尾崎：大正末期の不況や戦争などの影響で一時途絶えましたが、昭和25(1950)年に人形芝居を復活し、「安乗人形芝居保存会」を立ち上げました。国の重要無形民俗文化財に指定されたのは昭和55(1980)年です。復興に携わっ

台は、女性の会や黒子など人形芝居以外の演目も芸達者だと評判です。楽しくて、郷愁を誘う温かさもあると。

尾崎：うれしい評価ですね。保育所の子どもたちや女性の会など、老若男女、まち全体で盛り上げています。踊りなどの稽古に励んだり、おひねりを作ったり、皆で企画や準備をしています。

——舞台や人形も立派で、臨場感がある。高い評価を受けていますが、今、人形芝居の演目はいくつくらいありますか。尾崎：現在、「絵本太功記」や「傾城阿波の鳴門」など10以上の演目を上演してい

た方たちは苦勞されたのですが、それだけ地域には人形芝居への想いが強く残っていたのです。その想いは私たちも引き継いでいきたいと思っています。

——会員はどのような人たちで、どんな活動をされていますか。

尾崎：安乗では、地区民が保存会の会員となり、役員13名を中心に地区全体で「安乗の人形芝居」を支えています。人形の遣い手は、23名いますが、安乗だけでなく志摩市各地から参加してくれています。活動としては、毎年9月の第2土・日曜の「安乗神社秋季例大祭」で、境内の舞台で奉納します。このため5月から準備や練習に入ります。また、指導に行かせていただいている「東海中学校郷土芸能



さまざまなかしらが伝わる※

クラブ」の生徒たちは、祭りで中学生だけで一つの演目を演じます。人形遣いや三味線、義太夫(語り)もがんばって自分たちだけで上演するんですよ。平成30(2018)年3月に「志摩市立安乗中学校」と「志摩市立東海中学校」が統合されたのですが、このクラブにも安乗以外の地域の子たちも参加してくれています。また祭りの他に、小学校を訪問しての出前授業なども行っています。

——「安乗神社秋季例大祭」の奉納舞



中学生たちの稽古風景※



「絵本太功記」の一場面※

にしていますが、手入れや修理は、技術面でも資金面でも困難になってきています。

——今年の「安乗神社秋季例大祭」は9月10日(土)・11日(日)です。好天に恵まれて賑やかに「行われよう」と思っています。

インタビュー…堀口裕世



舞台上に並んでのあいさつ※

※印の写真は取材先から提供していただきました